

協議会ニュース 42号

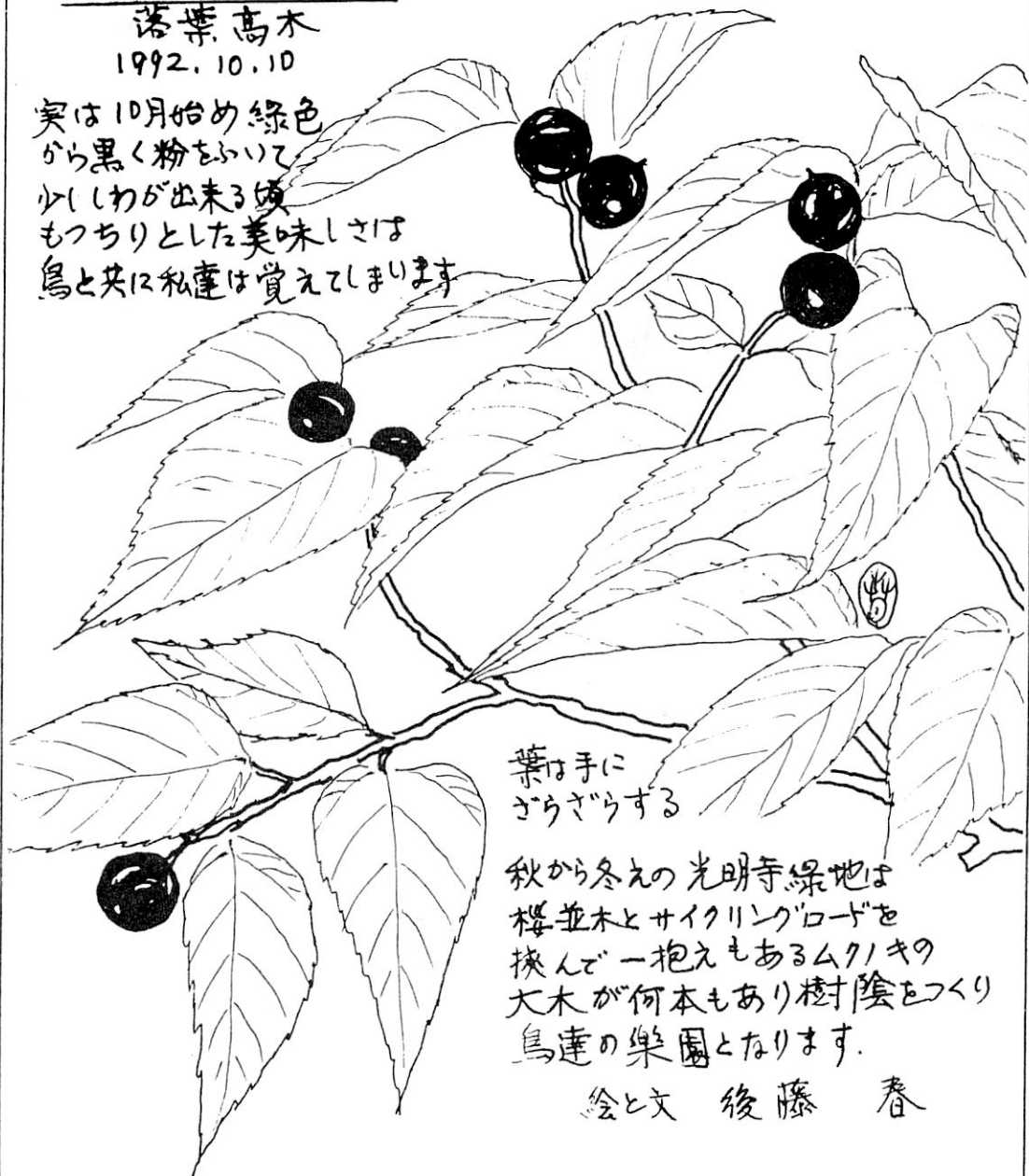
愛知県自然観察指導員連絡協議会 1992. 11

ムクノキ(ニレ科)

落葉高木

1992. 10. 10

実は10月始め緑色
から黒く粉をふいて
少しわが出来る頃
もつちりとした美味しさは
鳥と共に私達は覚えてしまいます



葉は手に
ざらざらする

秋から冬への光明寺緑地は
梅並木とサイクリングロードを
挟んで一抱えもあるムクノキの
大木が何本もあり樹陰をつくり
鳥達の樂園となります。

絵と文 後藤 春

同窓会

9月13日(日) 愛知青少年公園

昨年、私達が指導員になってから一年がたちました。「皆さんどうしてみえるかしら」「もう一度会いたいね」の何気ない会話から名古屋支部の篠田さんが呼び掛け人となって下さり、今回の同窓会が開かれました。

当日は10名が参加、事務局から会長の大竹さん、佐藤さんに出席していただきました。また、欠席者から20名の方々が近況を伝える返信を下さいました。

午前中は参加者一人一人の、この一年の活動報告、事務局との意見交換を。午後はあのなつかしの森へ出掛け、観察会を行うという日程でした。活動報告を聞いていると、既に観察会を主催している方、参加することを活動としている方、機関誌などを発行している方など様々でまたその活動に寄せる思いも色々でした。日頃盛んに活動をしていない私にとってはいい発奮剤になりましたし、とても嬉しく思いました。そして良き情報交換の場であったとも思います。

午後の観察会ですが、大竹会長さんを先頭に行きました。ここでも思い起こすことは多く、一年間に忘れてしまう事の大きさを感じました。ですが、何より外は気持ちよく、会長さんの一つ一つのお話がとても有意義でしたし、これからの観察活動のヒントもありました。

今回参加して思ったことは個々の活動がまず出発点ではないかなと言うことです。そして同窓会が個々の接点であれば良いなと。

当日皆さんにお会いできて楽しかったです。参加されなかった方々には次の機会に是非お会いしましょう。次回は泊りでという話も出ています。お忙しい中、出席して下さった会長さん、佐藤さん有難うございます。篠田さんお疲れさまでした。来年も宜しくお願いします。

(加藤 純子)

ただただ、自然と触れ合うことの喜びを人に伝えることができた、という熱い思いばかりで、そう、「指導員」と呼ばれるには非常におこがましい程、知識も経験もないことはわかっていながらも、目を輝かせ、胸をドキドキさせながら講習を受けたのは、ちょうど一年前でした。

そんな意気込みや緊張感を甦らせることができたのは、先日、青少年公園で行われた同窓会に参加したからです。同期に指導員になられた方々のお姿を拝見しご活躍ぶりを聞かせて頂いたりしているうちに思うことは、自分の一年を振りかえっての反省ばかりです。少しでも「指導員」らしくなろうと、同じ職場の指導員の加藤純子さんと“KATO² 企画”なるものを結成し、「あのなも通信」という新聞の発行を主な(唯一の)活動として頑張ってきました。内容の無さ、レベルの低さは最初から分かっていることなので、今更がっかりすることもないのですが、その他にも思うことがありました。それは、一年たつうちにいつの間にか、初めの頃の思いが、日常生活の流れのなかにまぎれこまれてしまっているのに気づいたことです。例えば、花の名前や、昆虫の知識も大切だとは思いますが、ついそればかりに走ってしまい、「喜び」を忘れかけていた気がします。

午後、公園内の森に出かけました。一年前に初めて知ったモンゴリナラや、美しい蛾や、珍しいセミの塔などたくさんの自然を観察しながら、さらに森を全体的に見ること、時間の流れでとらえることなど、講習会の時によく言われていたことを思い出し、本当に充実して、楽しい観察会でした。

一年をふりかえり、これからの活動に向けて励まし合える機会として、それぞれ頑張ってみえる方が同窓会という形で会えることは、ありがたいものであり、今後も盛り上げて行ければと思います。

(加藤知重子)

愛知県自然観察指導員第8回生同窓会研修会を終えて

名古屋支部

篠田陽作

平成3年9月14日台風くずれの低気圧の中、傘をさしカッパを着てのフィールドワークから始まった平成3年度指導員講習会、熱くハードな講習会から丁度一年目の9月13日に青少年公園で行われた、第一回同窓会研修会の報告をします。会場の第三会議室は去年の会議室の向いの部屋です。9時30分を過ぎると懐かしい顔が一つ又一つと集まってきます、お互いにその後の活動の様子とか、近況などを話し合いながら再会を喜びあう。事務局長の佐藤さん、協議会会長の大竹さんも到着して開会、大竹会長佐藤事務局長の挨拶の後、各自のこの一年間の活動報告にはいる。山崎さんの東山植物園の東海の森の解説員の活動、宮原さんの境川自然観察会の機関誌を一年間で21号まで発行するとゆう素晴らしい活動とか、梶野さんの子供の観察会での苦労話し、加藤純子さん、加藤知重子さん二人でミニコミ誌の発行、垣見さんの港保健所の健康展の中でのセミガラ分布調査、環境保護に取り組んでいる岡崎さん、去年の講習会に持ち帰った、モンゴリナラの発芽に成功して12本も育成中の原田さん、知多支部で大活躍の石原さん、岩倉ナチュラリストクラブで活躍している三輪さん、身近な自然を楽しんでいますとマイペースの三津井さん、そんな皆さんの

話しを聞いて私も元気が出てきました。

その後座談会に入り指導員活動についての話し合いの中で出た意見を書いておきます。

#1 指導員講習のみで終わるのではなく、その後一年間ぐらいの間だに養成講座的な観察会を5～6回おこなって見習い期間を作って欲しい。

#2 各支部では新人養成の為の指導員を作り指導をしてほしい。

#3 各支部の会合や行事に参加しやすいように連絡を密にしてほしい。

以上のように最初一年間はかなり積極的に働きかけを必要とするようです。

12時から1時まで食事をした後午後は外に出てのフィールドワーク昨年の初日に行ったとおなじコースで大竹会長の指導で出かける。

去年は話しを聞いても理解できなかった事が、今年はすぐに理解できた、一年間の成果かなと思ったりした。途中佐藤さんの森や林を見た時に気持ちよく感じる森や林には良い自然があるとの話しに感心したり、大竹会長のクズの葉の食こんから昆虫が判る話し、真ん中からたべるヒメコガネ、ふちから食べるゴフキゾウムシ、葉の中を食べるクズノチビタマムシ、などなどまだまだ勉強することが沢山あるなと思いました。林の中へは行って往くと去年は沢山あったキノコが今年はぜんぜんありません。今年は記録的な少雨の為にキノコ類はまったく見あたりません。同じ自然でも気象条件によって毎年おなじではないのだと新しい発見をしながら観察会は進んでゆきます。ヤママユのガを見付け、ドングリを拾ったり、楽しみながら奥の湿地へたどりつくとシラタマホシクサが丁度見頃で、思わず拍手で感動です。アカガエルの珍客にで合ったり、やはり自然の中が一番です。アッとゆうまの2時間です。心残りですが会議室に、帰りコーヒープレイクをしながら今後の同窓会運営と来年の予定、各支部の同窓会委員を選び又同窓会の機関誌を『モンゴリナラ通信』とし原稿が集まり次第発行する。お互いに今後とも頑張ろうと再会を約束しながら午後4時に閉会をしました。最後に同窓会を行うにあたり会場確保など色々お世話を下された佐藤事務局長に厚くお礼申し上げます。皆さん来年も同窓会を行います、御希望、御意見がありましたらおたより下さい。『モンゴリナラ通信』の原稿もお送り下さい。

体の不自由な人の自然観察指導者研修会に参加して

名古屋支部 朱雀英八郎

9月5・6日、三重県菰野で「からだの不自由な人の自然観察指導者研修会」ネイチャーフィーリングがなされ、愛知から4名参加した。

(9. 6中日に写真記事)

視覚、聴覚そして車椅子の方にも自然に親しむ喜びをと毎年、研修会がなされているが、今回は三重の仲間の世話でなされた。30名を越える参加で6日には三重の方が10数名駆けつけて交流の機会となりよかった。

車椅子の扱い方、持ち上げるにはどうするかなど野外実習、耳の不自由な人との手話の実際そして鳥山(筑波大盲学校)、飯野(東京都指導主事)の話——自然が先生、出来ないことでなく出来ることを長く続けよう、障害は個性と考え、安全対策をしながら進める——といった熱のこもった話だった。

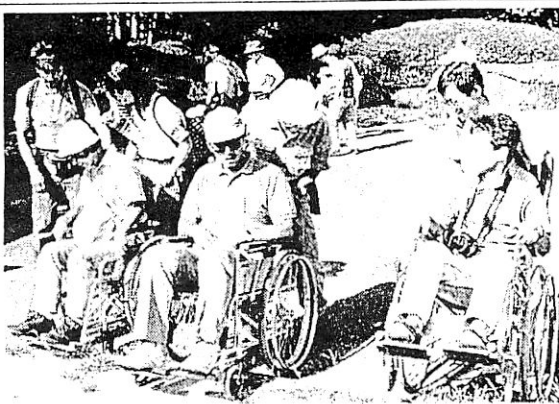
2人の目の不自由な方の参加もあり、目の見えない人に景色をどう説明するか。目隠しをして触った感覚から物を探すネイチャーゲーム。

さらには、夜の星の観察は単に星座の説明でなく夢をもって夜空を見るトレーニングとしてよかった。

歩き道でヘビの干からびた死体を見つけ、触ってみる実習となり、先ず介護者がやってみてから進めることが基本であることをみんなしっかり受け止めた。

この研修会に参加したのは、この8月、戸隠高原の観察会に協力して、森林植物園の身障者用スロープで車椅子の人を含んだ観察会を行ったことから『注意すべきこと・安全対策・見るだけでなく五感で知る努力など』を思ったからだ。

身体の不自由な人を含めた観察会は余裕があればいくらかでも協力したいが、いま行っている観察会を続けながら行いたい。リーダーが増えればいくらかでもできるので是非、観察会に協力下さい。 ※



身体障害者の立場を理解しようと、車いす実習をする参加者ら＝三重県・菰野町の三重県民の森で

身体障害者らに自然観察を楽しんでもらう際、どんな点を注意すればいいかを学ぶ「自然観察指導員研修会」が5日、三重県三重郡

体の不自由な人の自然観察を手助け

三重・菰野で指導員研修会

菰野町の三重県民の森に、東海地方をはじめ全国の福祉関係者が集まって行われた。

日本自然保護協会(本部・東京)が、身障者にも観察の機会を増やし、より多くの人に自然のよさを知ってもらうようと、県内では初めて開催された。

車いすの人と耳の不自由な人への介護方法が中心で、参加者らは野外に出て、障害者の立場から「どんな所が危険か」を体験。参加者らは、「歩いている時には何でもないスピードでも、人に押してもらうとすく早く感じる」「視点が低いので、観察にいいものもある」と、驚いていた。研修会は、6日も引き続いて行われる。

※ 一観察会のあり方について

会員の参加が少ないと言われるが、ボランティアでしていることで、高望みは無理である（中には資格と考えている人もいようだ）。まず、リーダーが楽しいこと。続けることが基本であり、説明の仕方とか内容が不十分でも自然への自分の思いや感動を伝える事でいいのではないか（むつかしく言いがち）。

楽しく遊びながらの観察会、又来てみたい、興味を持つ、いくつかのポイントをきめ説明する程度でほかは自由にしている、テキストも地図と注意程度にしている、リーダーが説明というよりお互いに知っている者、気づいた人が教えることで進める。

私としては仲間を増やすことを（全年齢層、ヤング、子供を中心に）第一にしている。9月には秋の活動案内葉書を100通以上出した。新

聞、地域などうまくPRすれば参加者は結構集まる。場所の選考も大切。12月の打ち上げ会には仲間で「焚き火を囲んで」焼きパンなど楽しくやろうとしている（初めての人は誘わない）。批判もあろうがまず仲間を増やすこと、続けることがもたなろう。

それにしても自然が大切と思い続ける中で、開発が進み自然がますます少なくなり寂しい思いを持つが、皆さんどうですか。

なお、身近な自然観察会は名古屋東部で春秋に続けて行い、夏は信州戸隠などへ出掛けている。クーラーの部屋より野外に、議論より外へ出て楽しむことが優先である。

そして、今は自然の再生、回復を考え、休耕田の活用、過疎地へ出掛けるなど夢を広げている。

なぎさと浜の考現学 6

砂浜の漂着物

—人間はゴミをつくる動物である—

東三河支部 高橋 康夫

海岸の吹き溜まりのようなところにあるはあるはゴミの山。テトラポットの内側にもすごい量、これがみんな人間様の出したものかと思うと恐ろしい。

ひとつ漂着物の研究でもやってみますか。木片に混じって、発泡スチロール、ビニール類、プラスチック類、果てはタイヤまであります。いずれも日光や海水の中でも分解されず、簡単には自然に戻れないものばかりで困ったものです。

人間がこんなにたくさんの捨てるものを作っているなんて驚異です。出所は海上で、陸上で捨てられたものばかりで、人間の身勝手さの現れでもあります。また、釣り客の残したからみあった釣り糸と釣針、花火の燃えかすなど、ひとえに利用する者のマナーの悪さに原因があります。

砂浜にこんなにたくさん漂着物があるのですから、海には膨大なものが漂っていることでしょう。海をこんなに汚してよいのでしょうか。生命を誕生させ、はぐくみ、恵みを与えてくれる海に対して人間は何という愚かなことをしているのでしょうか。

私たちは日常の会話の中で「この件については水に流して・・・」などと使ったりしますが、その言葉のように、人間が今のまま物を捨て続けるようなことをしていたら、自然からひどい仕打ちをうけることでしょう。砂浜の漂着物を見るにつけ、物質文明の末期的症状ではないかと心配いたします。



視察研修に参加して

知多支部 石原 洋一

8月22日(土)、23日(日)の一泊2日で岐阜県尾上郷のブナ林伐採現場とニコイ高原の池ヶ原湿原の視察研修があり参加しました。その後、9月13日(日)に1年目指導員交流会があり、その後で事務局から先の研修の感想を書くように言われ、私も早く仲間に入りたいという気持ちから、その場返事で承知しました。ところが帰宅して視察研修の記録を探したところ無い!のです。どうも我が家の掃除家さんに捨てられてしまったようです。雖然とリュックにねじ込んで放っておいた自分も悪いのだからと反省・・・!。何度か事務局に事情を説明して断りの電話をいれようと悩んだあげく、今の場合、自分を素直に出して、つまらん感想でも書いた方がベターと勝手に結論をだしました。それ故、私を簡単に自己紹介し、そんな人間の感想と思って下さい。

私は昭和19年11月の生まれです。歩行年齢に達する頃、骨髄炎にかかり大きな手術を2度うけダメージが固定したのが中学生の時でした。戦後のこの時代によく生きてこれたものだと自分でも思います。したがって運動らしい運動はやってこず、学校の体育の授業に辛うじて参加したのは高校の時でした。丘らしい所に登ったのは大学に入ってからでした。大学(薬学部)では分子薬理とか製造・分析の分野がスポットをあびて生薬学や薬用植物学はあったものの私は多くの学生と同じように、ほとんど興味をもちませんでした。今から考えると全くもっていないことをしたと思います。縁あって診療所の薬剤師として就職し、ほとんど立ったままの仕事の中で体が鍛えられてきたと思います。そして病院の中間管理職の時、今はやりの「プツン」をして再び診療所の薬剤師となり、今晴々と働いています。プツン休暇中、今まで何となく無意識に集めていた野鳥や野草の本や

ビデオをはじめてゆっくり見て、目が覚めたというか、これだ!!と思うものがありました。だから、自然観察歴は浅くまだ4~5年です。皆さんの足元にもおよばないものが恐れ多くもあちこちの催しに出まくってますけど、お許しください。

さて本題の視察研修会の感想ですが、第1日目はまず高山短期大学付属自然博物館の見学です。学芸員の方とは会えず残念でしたが、中は自由に見せて貰い心意気が伝わってきました。この博物館は「自然保護」誌の裏表紙裏の「玄関先でのレポート」を書いている方がこの学芸員であることを覚えていたので、どんな短期大学なのか興味がありました。看板にある学科名は自動車工業学科と商業?または経営学科の2科でした。そのアンバランスをどう表現したものか。案内して下さった村瀬さんの話では街の自動車関係でもうけた人が設立したものだとか。一度、その設立者の話もうかがいたいものだと思います。次は、1日目のメインコース、ニコイ高原の池ヶ原湿原。比較的新しい坂の道が作ってありましたが、両脇にピッチリとアシが大人の背かそれより高く茂り全く見渡しがきかず残念でした。アシの間から、チラチラとミズバショウの大きな葉が見えます。我々6人以外人影もなく、ナンヤラ(?)フウロのピンクの花、セリが小川の中で大きくのびています。ヤマトリカブトかナンヤラ(?)トリカブトかわかりませんでしたが、いっぱい咲いています。毒草には興味があって、降旗さんの「ドクゼリでは?」の声に茎をひっぱってみました。違いました。残念!!一輪のコオニユリも記憶に残っています。板道を抜け山道を登り出すとツリフネソウ・キツリフネソウが前後左右に、やはり山に入った感じです。シシウド(?)やらウバユリがあちこちにつたっています。湿

地のアシを刈るべきかどうかはわかりませんが、きっと来シーズンまでには刈られるでしょう。

第2日目は白川をぬけ尾上郷に入り、川沿いの道から建設中の林道に入りました。林道といってもダンプが通るそうで私のイメージの中の林道とはケタが違います。ここの観察を続けておられる村瀬さんのパジェロに参加者全員乗り込んでグングン登っていきます。裏日本型のブナ林がダーと伐られ尾根に帯のようなブナが残してありましたが皆枯れています。少しばかりブナを残すのは、それを母樹として再び山がブナ林として復活するのを期待してのことだそうです。しかし、現実には風にさらされ立ち枯れます。ここから伐り出すブナは家具材料とするための目的だが、その事実は全くなく、まず間違いなくパルプの原料としてチップになっているとのこと。伐る人自身も「わかっているけど止められない。」この現実には寒々とした営林署のやり方を見る思いでした。それでも造りかけの林道の先端にいき、流れでる源流の水の中にサンショウウオとトビケラの幼虫をみつけて（降旗さんが見つけたのだが）、また村瀬さんが「ほらっ」と上を指さすので、あわてて双眼鏡でみると比較的大きなタカがゆったりと滑空していました。

私はブナ林は初めてであり、本のみで知っているだけでしたので空気を吸い込むだけで満足でした。帰り道、シラヒゲソウを初めて見せてもらったし、降旗さんが「あれがドクウツギ」というので本で知っていた様な葉っぱを見たような気はしたが残念ながら手にとってみることは出来ませんでした。参加された方はベテランばかりで自分の勉強不足を痛感しましたが、キャリア不足はいたしかたなく、今後もあちこち顔を出しますので宜しくお願いします。

簡単なウッドクラフト ④

名古屋支部

榑 幹雄

樹の幹を利用してコースターを作ってみませんか？

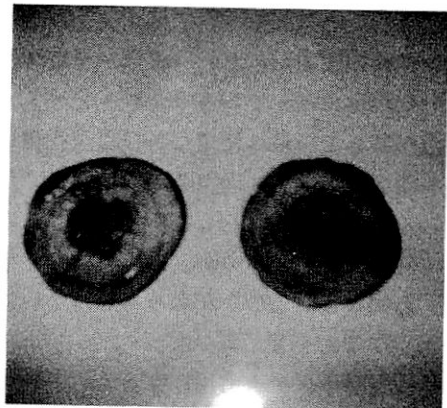
I. 準備品

- 1) 幹(枝)は入手し易いもの(直径8 cm位)。
- 2) 鋸
- 3) コンパス(定規)
- 4) サンドペーパー
- 5) 彫刻刀
- 6) 水性ニス

II. 作り方(1枚分)

- 1) 樹皮の剥げるものは剥ぐ。
- 2) 高さ1.5 cm程に印し切る。
- 3) 中心からコンパスで直径6 cm程の円を描く。
- 4) 彫刻刀で深さ2~3 cmに掘る。
- 5) ペーパーで面取りをする。
- 6) 最後に水性ニスで仕上げをし完成。

III. 安全のため材料は少し長めにします。
鋸や彫刻刀の扱いに注意してください。
完成品は木目の美しさを楽しめます。



自然との新しい出会い

東三河支部 梶野 保光

気持ちよく車を走らせたい気分の休日、たいてい、そこを走る。

姫街道（国道362号）当古橋付近。気に入った風景がある。豊川（とよがわ）である。

学生の頃、河原に寝そべり 植物図鑑を開き、昼寝を楽しみに自転車に出掛けた場所。河原に下る堤防の坂道の向こうに弧を描いた流れが浮かび、細い農道が、トンボや蝶が舞う木立ちのなかに入っていく。

はるか本宮山のやまなみが、豊川の流れに色を添える。今も昔も広がり表情があって、あきのこない景観である。

エコロジカル・マネジメント

日本自然保護協会会長の沼田 真先生は、私が大学一年生の時の教養クラス担当であった。入学間もない頃、千葉の稲毛の研究室で面接を受けたことがある。それは奨学金支給審査のためである。「出身地は？」と尋ねられ、「愛知県東のはずれ豊橋です・・・」と答えたら、即刻支給OKをいただいた思い出がある。私にとって大切な恩人である。

こうして、私の造園家への道はスタートした。最近、学科の改組が行われ、緑地・環境学科とされた名称になってしまったが・・・

自然が好きで、選んだ道だが、現在在職している鉄道会社では、観光事業の営業面まで足を引っこんでしまった。50才をすぎて、造園屋として潜在していたものが、頭をもたげてきた昨今、造園と自然とのかかわりあいについて、次のようなことを考えてみた。

それは「自然の保全と活用によるランドスケープデザインの基本」ということである。

①ひとつの生態系として環境全体を扱うこと。

②自然は目的に合わせて適度に管理（マネジメント）されなければならないこと。

③自然環境の活用計画は人々の生活文化や精神への関係づけなどソフトウェアを含むものであること。

自然について幅広い知識と体験を持つナチュラリストであり、知識と体験に加えて、「技術－自然系のマネジメント」に秀でた造園家でありもうひとつの顔として、子供たちとなかよく出来る自然観察指導員を目指すことを心がけた。

造園と環境教育

最近、学会誌を読んで知ったこと

日比谷公園の児童遊園を舞台に、「ネイチャー・スタディ」（自然学習）が始められたのは、大正13年（1924）以後である。公園における児童指導事業の創始でもあるが、直接の責任者である末田ます女史の思想－園内の植物、昆虫、小鳥などを教材に自然に対する知識を、紙芝居やお話、園内探検ゲームを通じて遊びながら、学ばせるという考え方－

すなわち、ネイチャー・スタディに基づくもので、今日、我々たちがやっていることと類似しており、自然観察指導員の先駆的実例といえることができる。

東京農業大学の進士五十八教授はつぎのように言っている。

『末田ますの著書「児童公園」の、その眼目は《細々と何から何まで教える必要はない。

自然の驚異的な力を自らが感じ、自らが自然を愛し、知識と共に真の愛情をもつこと。

種類を多くしたり、珍しい動物を飼育することなども望ましいけれども、一木一草、あるいは一匹の蟻に自然学習の材料を見出し得る能力の方がより以上に望ましいことであり、この点からみてよき指導者こそ公園の命だ」ということになる。

イチョウの落葉の黄色に植物の変化を感じ、春の開花に自然の神秘を感じる。時間当たりの知識にのみ偏っている現代っ子にとって、ゆったりした真の自然との係わりをもたせることの、いかに大事なことか。」同感である。

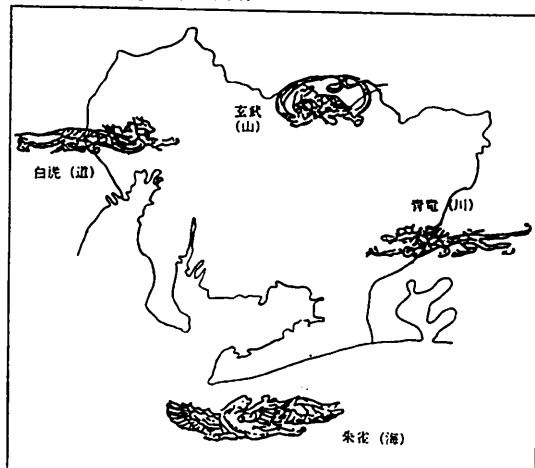
また、「公園計画などで具体的なデザイン・イメージを提案するというよりは、「自然学習」的なものが、いかに造園学的に大切な、否、人間の生活にとって大切な、それを訴え、あらゆる公園や緑地計画に“自然学習精神”をオーバーラップさせて欲しい。」と行政や造園家に訴えており、「自然学習園は学校や公園ばかりか、まち全体でも、個人の庭や労働者のくつろぐ工場造園のスペースの中にも、極端に言えば“ひとの心のなか”につくられてもよいのである。であるなら、最も好都合なのは、ありのままの大自然（山林や河川など）である。自然のままの空間を「自然学習園」化したのが、「自然観察会」である。」と進士教授は言っておられる。

この話は、私のような「駆け出し指導員」であり、自分では「古参造園家」だと思っている輩には、たいへん参考になった。

四神相応

中国の陰陽学にみられる「四神相応」というセオリーが私にとって大変興味深い。

「四神相応」の好立地条件



「四神相応」の好立地条件というのは、当時世界一の文明を誇った中国で発達した陰陽学において、社寺や城などの施設整備や都市計画の際には、宇宙を司る四つの神を次のように配することが、最善とされている。

東に、「青龍」の神が宿る川

南に、「朱雀」の神が宿る海

西に、「白虎」の神が宿る道

北に、「玄武」の神が宿る山

とあり、つまり、「北側の緑豊かな山を背にして、南前方にきれいな海を眺め、東から清流を引き、飲料水に恵まれ、西の道から運ばれてくる豊富な食糧で豊かな生活をする」というのが人間にとって、ユートピアであると教示している。

ところで、我々の住む愛知県の立地条件は、はからずもこの「四神相応」の地形となっている。県土が発展する立地条件はもちろん、海あり山あり川ありで、自然観察のフィールドにも恵まれた場所ではなかろうか。

そういう意味で、豊かな自然資源に恵まれた特性を十分に生かしながら、人と自然の共生が図られた生活環境の整備が必要だと思う。

花鳥風月のある街

今、人々はアスファルトジャングルから自然のジャングルへ飛び出す。フィトンチットのシャワーを浴びる森林浴に。

小鳥やリスなど可愛い仲間に出合いに。

名もない花と戯れに。

落葉のふかふかマットを楽しむハイキングに。

森の温かさに触れに行く。

木の肌合い、ぬくもりに。

森と遊ぶ、森に親しむプロジェクトのスタートである。都市に森をつくる。近郊林を有効に活用する。都市で失った緑を取り戻し、森を身近な友とする街づくりが今、動き出す。

まさに「花鳥風月のある街づくり」である。

10月1日発表した建設省の「第四次都市緑化五カ年計画（1992～96年度）」にあるように、今後「花鳥風月のある街」は沢山つくられ

てこよう。しかし、大事なことは、地域住民が自然環境を愛でるライフスタイルを維持できるかということである。

そのために、自然観察指導員の役割は大きいと思う。自然とふれあうイベントやキャンペーン、草花や樹木、昆虫、野鳥と親しむづくりが重要な意味を持ってくる。とりわけ、地域で育つ子どもたちへの継続的な啓蒙活動は大切だと思う。行政も花鳥風月の揃った地域をつくり上げようと腰を上げています。地域の人たちも、その気になってきている。

その努力を我々一代限りで無にする手はない。

私の住んでいる豊橋市でも、「自然と優しくふれあって自然とステキなお付き合い」

一季節を迎える、季節が迎える—というキャッチコピーで「東部丘陵レクリエーションゾーン」のイメージ計画がパンフレット化されている

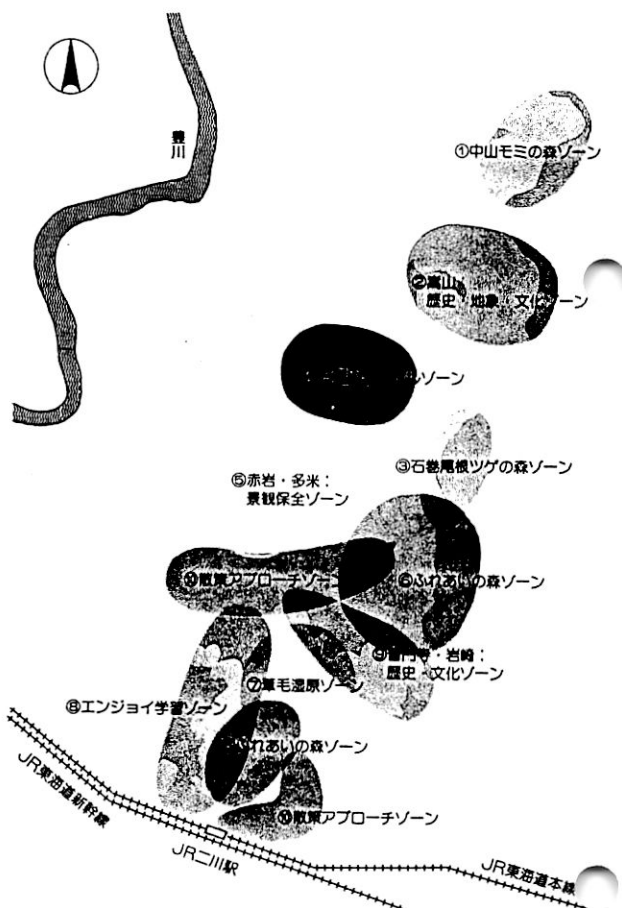
東部丘陵ゾーンというのは、南端は普門寺、岩屋観音から、愛知・静岡県境の山並み、いわゆる弓張山系（ちなみに静岡側からは湖西連峰と呼ばれている。）一帯、かの有名な葦毛湿原をはじめ多米峠、石巻山、本坂峠、北端の中山峠までの豊橋自然歩道本線から、支線を含む広い場所である。ここで市民からアイデアを公募し、“石巻尾根ツゲの森ゾーン”“嵩山：歴史・地象・文化ゾーン”“ふれあいの森ゾーン”をはじめとして、別図のように10のゾーンに分けて、自然を保護、育成しながら親しみやすい環境づくりをすすめていこうというものである。

イラスト風の鳥瞰図やバス路線や停留所も親切に記載しており、中折りのページには東部丘陵ゾーンの自然の情報がたくさん掲載されている。地方自治体制作のパンフレットとしては良いできばえである。もっとも、近頃は民間企業よりも自治体制作の観光パンフレットや資料の方が見やすくセンスが良いと思う。

一読されたい方は、豊橋市自然史博物館にもおかれているはずなので、恐竜の化石など見物がてらお越しになればよろしいかと思います

東部丘陵レクリエーションゾーン

ゾーニング図



自然系公園イメージ図
(湿原公園、雑木林公園)



ママコノシリヌグイ

今年の夏、私の勤務する事業所で、地域の子供たちを対象に「自然観察会」を行った。

売店の一角をログハウス調に仕切り、観察用具の双眼鏡からカメラ、自然観察シリーズの書籍、可愛いカモのカービング、赤外線センサーで、小鳥の鳴き声を聞かせ、大自然の素晴らしさを映像で流すビデオ装置、売れ筋の恐竜シリーズ、化石、ウッディパズル、小物では、ネイチャー関連のキーホルダーも扱い、所属する東三河自然観察会の一般募集の観察会案内も掲出し、かなり自然にこだわった店を社員の手作り、三ヶ日町の事業所で始めたのが、昨年の秋。さらに、自然へのこだわりの姿勢を明白にしたのが今回の自然観察会であった。

企画をつくり、ワープロで「ちらし」を作成し、なかよくしている新聞社へは紹介記事の依頼をしたまではよいが、肝心の指導員が私一人では荷が重すぎる。なにしろ、新米である。期待して集まってくる子供たちに気の毒である。困惑していたところ、先輩指導員の高橋康夫さんと岩瀬直司さんが助け船を出してくれた。おかげで観察会当日、私は指導員どころか子供たちと一緒に日頃見慣れている奥浜名湖の自然を楽しませてもらった。

同級会の翌日、一回下見をただけで当日のカリキュラムを作ってしまう高橋さんの素晴らしさ。急なお願いにもかかわらず、休日をさいて下見までしていただき、おまけに観察会当日私の知らなかった「ママコノシリヌグイ」を教えてくれた岩瀬さんの自然観察にかける情熱。観察会も成功で、お二人にただ頭の下がる思いである。

昨日送られてきた「自然保護」10月号に山梨の植原 彰さんが「トゲトゲのひみつ」というエッセイを書かれていたが、そのなかで「ママコノシリヌグイ」らしき写真カットを拝見し、あの夏の日見かけた「彼女」を懐かしんだ。

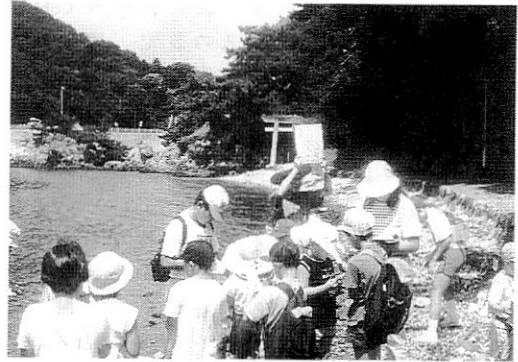
自然観察指導員になってから一年あまりが、過ぎようとしている。会主催の観察会には、

なるだけ出席しようと努めている。

以前は、たまの休日ゴロ寝と決めこんでいたわたしであるが、最近は少し違う。

休日ともなれば、子供たちはあまりつき合ってくれないので、家内と二人で自然の中へ出かけることにしている。

なぜなら、自然観察指導員になって体験した新しい自然との出会いを楽しみたいからである。



普及部会長のたわごと

山田 博一

(1) 自然観察会実施結果について

今まで送られてきた実施結果報告を見て、私自身、協議会の原点は観察会で、それを大事にしていかなければ……ということを痛感させられました。しっかりした観察会をやっているところは、少なくとも下見を2回やって、責任を持った準備を進めているようです。新しい指導員を育てる努力もされています。また、市町村の後援をとりついたり、指導内容・方法の検討を行い、終わった後の効果・反省をやっています。東三河のように、コースの設定、概要調査で1回、テキストをもとに内容検討で2回、中にはテキスト検討を入れて3回やっているところもありました。指導内容もさることながら、本番で、「日程説明」「遠くから眺めてみよう」「森の中の虫たち」「森の観察」「いまいる場所を見つけよう」「人と水のかかわり」「牛の滝について」「滝の周りの植物」「終わりのあいさつ」の9項目を9人の指導員に割り振って、47人の参加者に観察会を行ったのは見事というよりほかはありません。

私は最初普及活動は、派手に新聞社やテレビ局に載せてもらって、目立つことを行うことだと思っていた。しかし、そうではなく、観察会の基本を一つ一つ大事にして、内側よりかためて、新しい指導員を育てて、愛知県自然観察指導員連絡協議会として恥ずかしくない観察会をやるのが、大事な普及活動であることがわかりました。

(2) 協議会の活動に参加されない人へ

私は教員をしているのですが、もしいろいろな力を持った生徒の能力を引き出せず、埋もれさせたままクラス運営をやっていたとしたら教師として失格です。300名以上の指導員の中には優れた人材がたくさんいることは、いろいろな情報で入ってきています。その人達を生かし切っていないとしたら当然、普及する側にも責任があると考えます。

平成5年度の協議会の目標の一つに、「遠のいていた人が参加しやすいようにする」ということを掲げていきたいと思います。

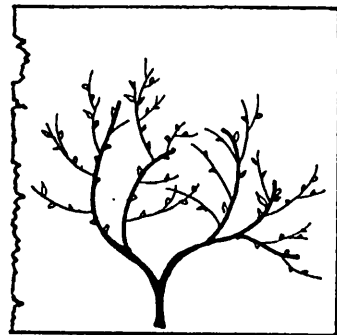
(3) 弓道協会に入ってみて

自然のことを扱うこの機関紙に突拍子もないことを載せてみます。実は、今年の6月から弓道の世界にひょんなことから足を踏み込んでしまいました。週2回道場に通って「射」を勉強しています。そこで、自然保護協会ならぬ弓道協会の人達から手ほどきを受けています。そこで指導員ならぬ有段者が私を指導してくれるわけですが、初段の人も、高段者の人も教えられる範囲でしっかり教えてくれます。よく観察会で問題となる指導員はなんでも知っていないとやりにくい悩みを見事に解決してくれています。道場では、どんな実力の人も献身的に教えてくれるのです。熱意が伝わってきます。また、はじめてきた人、知らない人に対してしっかり声をかけるのです。自分の後を継ぐものを懸命に養成するのです。

この時、自分自身観察会でははじめてきた人、ひさしぶりにきた人にこれだけのことをしているのか反省させられました。私自身、植物の名前も動物の名前もあまり知らないのかこつて、ついつい後継者の養成に尻込みをしていた事を反省させられるのです。

最後に、一番印象に残っていることは、弓道の講習会で、副会長の大正7年のお婆さん（年はとっていても射位に入るとバンバン的を当てるスーパーウーマン！）が、講習会に来たばかりでなにもできない人に向かって「皆さんようきて下さった」と感謝されていたのが印象に残りました。

私は、指導員の講習会を受けて入ってきた人達は少なくとも自然に興味を持ってそれを勉強しようと身銭を切ってきた人達です。その人達に「感謝」までは行かなくても、大事にしていかなければと思いました。私の意見をどう思いますか？どしどしご意見を下さい。



自然観察施設訪問 9

ー 赤沢自然休養林 ー

中西 正

本年の東三河支部の宿泊研修は、赤沢自然休養林を中心にした木曾谷で行われた。赤沢自然休養林は、森林浴で一躍有名になり、ヒノキの巨木林としてのイメージが強い。この自然と施設について見てみよう。

上松から入る道沿いにはシラカバ・ミズナラが生え、溪流に澄んだ水が流れ、休養林への誘いになっている。駐車場は有料で、これが実質的な入山料の役割を果たしている。駐車場近辺中央園地にはいくつかの建物が散在している。土産物や、レストハウスそれに森林資料館、森林センター、森林鉄道記念館で、特に後のものは自然に関わりを持った建物である。来た人を楽しませるために、バーベキューやアスレチック、水遊びができたり野外ステージがあったりする。それに距離は短い森林鉄道が動いている。

森林資料館は森の動植物標本展示と林業関係資料の展示がなされている。うれしいのは木曾五木の材と生の葉が並べられていたことだ。森林センターは休憩所の一角に林業関係の写真や資料が展示されているだけだった。鉄道記念館は、森林鉄道の機関車を初め鉄道関係の資料が展示されている。森林鉄道を使って大規模に木切り出していたころのことが沸き上がってきた。しかし、いずれも展示方法に工夫が無く、この国有林の自然や状況がいきいきと伝わってくる気がしない。これからの国有林をどうしたいか、というようなメッセージがあってもいいのではないかと思った。

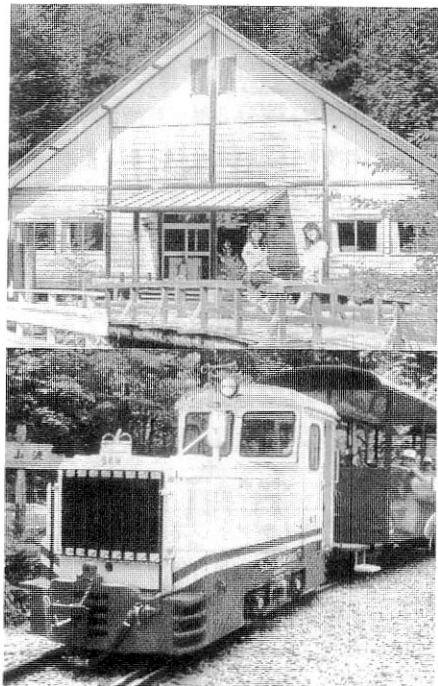
自然休養林という名前から「体」に視点を置いた利用法のためか、遊びの要素は作られている。また健康のための散策路も整備されている。しかし、良い自然を解放する時は、その自然の良さを解説がなされるべきと考えられる。そのための自然解説が必要であろう。散策路は整備されているというものの、生き物や自然の

解説板はごく少なかった。巨木に高さ太さ等、通りいっぺんの数字が並んでいるだけであった。やや乾燥している様子と地形はアメリカのヨセミテを連想させたが、アメリカならもっときめ細かな自然解説がなされるであろうとも考えられた。今、国有林は材木生産地からの脱却が図られている。その意味からもこの地の訪問者に自然に対するピーアールをする義務があるのではないだろうか。中央園地周辺の自然関係施設の統合と内容の見直し、散策路の自然解説板の整備、それに森林鉄道を自然解説施設に加えればすばらしいエリアができ上がりそうである。

自然の中に入ってくる人もその自然全般に注目する人は少ない。我々自然観察指導員ですら、散策路中では木曾五木の区別点のみに話題が集中していた。多くの人が訪れる要素を持つ地域である一現に、我々が訪れた時は台風の影響で強い雨が断続的に降っていたが、それにもかかわらず多くの人が来ていた一。それだけに自然の仕組みを学ぶ場所としての位置付けも必要と考えられた。

▼ 森林資料館

▼▼ 森林鉄道 (パンフレットより)



アカネの仲間

知多支部 相 地 満

1 はじめに

アカネ（アカトンボ）の仲間を単に体が赤いトンボと定義してその数を調べたら何種類になるだろうか。恐らく相当の数になると思われる。水草の繁茂した池の上を飛び交うショウジョウトンボは実に鮮やかな赤い色をしているし、小さなハッチョウトンボもそうだ。今は少なくなったベニイトンボもそうだ。でもなぜか「夕焼け小焼けのアカトンボ」というイメージには合わない。分類上アカネの仲間は「前翅結節前横脈が10本より少なく最後のものは前縁室にあつて亜前縁室にない」という特徴を持つものを言う。だがこの定義も大変である。即座に定義された事柄が視覚的に脳裏に浮かぶだろうか。

2 アカネの種類

アカネの仲間は、日本に21種（「原色日本昆虫図鑑下巻」保育社日浦ほか）とも17種1亜種（「日本産トンボ幼虫・成虫検索図説」東海大学出版会石田ほか）とも言われている。そのうち愛知県には13種（「愛知県の昆虫（上）」1990愛知県安藤ほか）が記録されている。知多半島におけるアカネについては上記の「愛知県の昆虫（上）」には10種記載され、そのうち東海市においては6種が記録され（「東海市のトンボ」知多の自然談話会1991相地）標本にされていたが今年更に2種追加され8種になった。都市周辺ではこの6～8種程が普通にみられるアカネの数と言うことになるのではないかと思う。

その種名は以下の通りである。

東海市のアカネ 1992年

マイコアカネ	+	ノシメトンボ	○
マユタテアカネ	◎	リスアカネ	+
ヒメアカネ	+	ナツアカネ	◎
コノシメトンボ	+	アキアカネ	○

3 アカネの見分け方

ある教員対象の野外研修に出かけた時の事で

ある。高名な講師はやたらと植物名等を並べ立て、ふと稔りはじめた稻田の上を行き交うウスバキトンボを見て、あれがアキアカネだと言っていた。おまけに夏に見られるのがナツアカネで、もう秋になりかけているからアキアカネだと感慨ぶかけに（分かり易い？）説明をしていた。その前にアラカシとシラカシの区別がついていないことに気付いていた私は何かしら嫌な気持ちになってしまった。官僚的な（あるいは権威主義的なと言った方が良くかも知れないが）理科教員対象の研修会といえどもこの程度である。私たちは名前にこだわらない自然の見方をするという方法論を持っている。それが方法論としてしっかりした内容を備えているかどうかは別としてやたらと種名を並べてこと足れりとする事だけは避けていきたい。同時に生物社会の一構成単位としての種に着目する場合、種名は正確でなければならない。中々大変なことではあるがそう努力していきたいものである。アカネを見るには胸の黒色条斑に着目すると良い。

アカネの黒色条（斑）



4 おわりに アキアカネの観察

観察を続けているとアキアカネが里に降りてくる日を予測できるようになる。東海市での羽化は7月上旬だがその後山地へ移動し、戻ってくるのは何時か3年前程前から正確に判断できるようになった。それは皮膚感覚の成せる仕業である。その日（10月上～中旬のうちの何れか）10時～11時頃の間に5～6匹の先発隊が現れ、枯れたヒマワリの先などにとまる。暫くして後続隊が続きあちこちの梢にとる。やがて午後になると続々とやってきて、中には雌雄連結してくるものもある。それは気に留める者にか気に留めることのできぬ小さな秋の出来事です。私にとっては大きな楽しみの1つです。

LETTERS ON NATURE

オオオニバス再び

知多支部 加藤 寿芽

東浦町内のため池、飛山池でオオオニバスが赤紫色の花をつけました。このオニバスは自生のもので、全国では6カ所位。愛知県では、渥美郡田原町の芦ヶ池のみ。東浦町で昭和56年度、57年度の2ケ年で東浦自然環境調査研究団を結成し、私も参加して56年の夏に発見、

「東浦の自然」に記載されたものです。その後姿見せず、平成2年に浮葉を見つける。平成3年には17株見られた。平成4年、池の水をぬき開花にこぎつけた。株は2カ所で2株。

中日新聞に記事が出て大騒ぎ。東浦町教育委員会より調査、記録、種子の採種、種子の配分、人工栽培、町内のため池の水質調査等を依頼されました。

飛山池で9年ぶりに開花し話題

オニバスの危機救済

東浦町 教委 保全めざし生態調査

東浦町有の飛山池に自生していると伝言が二三年前、オニバス(鬼目)になるといわれ、表面に「オニバス」が9年ぶりに花をつけ、話題となったが、町教委は二三年前、生態状況などについて実地調査を始めた。オニバスは全国的にも絶滅の危機にさらされており、極めて貴重。生態や生育環境等を把握し、将来の保全方法の確立に役立てる方針。

オニバスは、スズレン科の一年生草本。大きいもの



オニバスの生態を調査する人たちは東浦町の飛山池で

が中日新聞で紹介されると、反響を呼び、多くの見学者が現場を訪れた。同池のオニバスは、九年前に自生していた。しかし、池の改修等の影響で、その後、生えなくなったため、絶滅したとみられていた。

昨年、葉がでていたのが見つかったものの、水位が高かったせいか、花は咲かなかった。

今年は農業用の取水で水位が下がり、花の芽が水の表面に出たため、花をつけることができたらしいが、詳しい生態などは不明。このため、今回の実地調査になった。

調査は、知多自然観察会会員の加藤寿芽さんらが担当。水質や水の酸性度、透明度、水深などについて事前に調査していた。加藤さんは「オニバスを保護するためには、生態をしっかりと調べ、実地調査に役立てたい」と話している。

「豊田市自然観察の森」からの便り

冬鳥の渡来

尾張支部 長尾 智

11月ともなると、観察の森でも冬鳥が本格的に渡来するようになります。

冬鳥の中に少し大型で田畑でよく見られるものにツグミがいます。しかし、12月頃までは警戒心が強く、林の中にいることが多いので、目につきにくいかもしれません。1～2月には、田畑へ出て来るようになるでしょう。

ツグミとほぼ同じ大きさの冬鳥にシロハラがいます。シロハラはツグミと違って開けた場所に出て来ることは少なく、冬の間中ほとんど林の中にいます。そして、落ち葉をくちばしではね除けては、虫などを探して食べています。林床で、カサカサという音がしたら、目を向けてみましょう。

数は少ないのですが、トラツグミもいます。「トンボの湿地」の休耕田を耕すと、追い出された虫などを求めてトラツグミが現われます。

これらの他に、今までに見られた(当園における)冬鳥を挙げておきます。

番号	種名	科名	11月	12月
1	マガモ	ガンカモ	○	○
2	カルガモ	〃	○	○
3	ビンズイ	セキレイ	○	○
4	モズ	モズ	○	○
5	ミソサザイ	ミソサザイ	○	○
6	ジョウビタキ	ヒタキ	○	○
7	ルリビタキ	〃	○	○
8	キクイタダキ	〃	○	○
9	カシラダカ	ホオジロ	○	○
10	ミヤマホオジロ	〃	○	○
11	アオジ	〃	○	○
12	クロジ	〃	○	○
13	ウソ	アトリ	○	○
14	カケス	カラス	○	○

11月～1月の行事案内

*他支部の行事にも参加出来ますが、急な変更があるかもしれませんので照会の上、御参加下さい。

- ①主催 ②集合場所・時間 ③照会先
④行事のねらい ⑤参加資格・費用 ⑥備考

【11月8日(日) 岩屋堂観察会】

- ①県委託・尾張支部 ②岩屋堂無料駐車場
③大谷敏和 ☎0572-23-6907
④木や草の実調べ、落ち葉を食べるのは誰？

【11月13日(土) 室内研修会】

- ①知多支部 ②阿久比町中央公民館18:30
④祭りや厄除けに使われる自然物について

【11月14日(土)～15日(日) 会員研修会】

- ①知多支部 ②東海市農業センター14:30
④奥三河の動物と天体観測

【11月29日(日) 赤岩寺観察会】

- ①東三河支部 ②豊橋市多米町 赤岩寺
③間瀬美子 ☎0532-45-1335
④晩秋の自然観察

【12月5(土)・6日(日) 石巻山研修会】

- ①協議会 ②豊橋市石巻山
④会員研修

【12月11日(金) 室内研修会】

- ①知多支部 ②阿久比町中央公民館18:30
④92年行事の反省と93年の予定

【12月13日(日) 南知多の海鳥観察会】

- ①知多支部 ②武豊町中央公民館9:30

【12月13日(日) 立田村観察会】

- ①尾張支部 ②立田村葛木渡船場
③斎竹善行 ☎0587-37-7616
④江戸時代風の景色の中でカモをじっくり見よう。

【1月10(日) 善師野観察会】

- ①尾張支部 ②名鉄広見線善師野駅
③福富裕志 ☎0568-67-0167
④冬鳥をじっくり見よう・メタセコイアの化石を拾おう



～編集後記～

★今月も、投稿が多く編集作業が楽でした。原稿をお送り下さった方、どうも有り難うございました。お寄せいただいた原稿は全てを掲載していますが、健忘症の私のことですので『原稿を送ったのに掲載されてない・・・』という方があるかも知れません。そのような方がありましたら、是非、お申し出下さい。編集作業をしていて、誰かさんの原稿を落としているのではと、いつも心配になります。

★また、投稿戴いた方おひとりずつ、お礼を申し上げたいのですが、人数が多くとても出来ません。どうぞ、ご容赦下さい。

★37号紙上で、協議会ニュースのタイトルをもう少しやわらかい感じのものにということで、話題提供をしました。運営委員会でも会の愛称・略称が論議されました。その後、進展がありませんので、久々にその第2弾！英語の先生のお知恵を拝借した、こんなのは如何でしょう。Lovers of Nature in Aichiで略称『LONA』で『ロナ』と読みます。協議会ニュースのタイトルは協議会ニュース『LONA』。会員への電話も『もしもし、ロナの神戸ですが原稿をお願いします。』てな調子になります。可愛い響きだと思いますが・・・如何なものでしょう？

もう一つ候補を挙げると、大竹会長発行の自然情報誌のタイトル『Naturing』。これもなかなかいいと思います。さて、皆さんも愛称・略称を考えて、編集部会までお寄せ下さい。

★次号は1月号です。原稿の締切りは12月10日です。どしどしお寄せ下さい。

編集部会 〒440 豊橋市多米中町1-12-3

神戸 敦 ☎0532-62-5308